

平成 26 年 2 月 15 日

明日香村教育委員会

明日香村発掘調査報告会

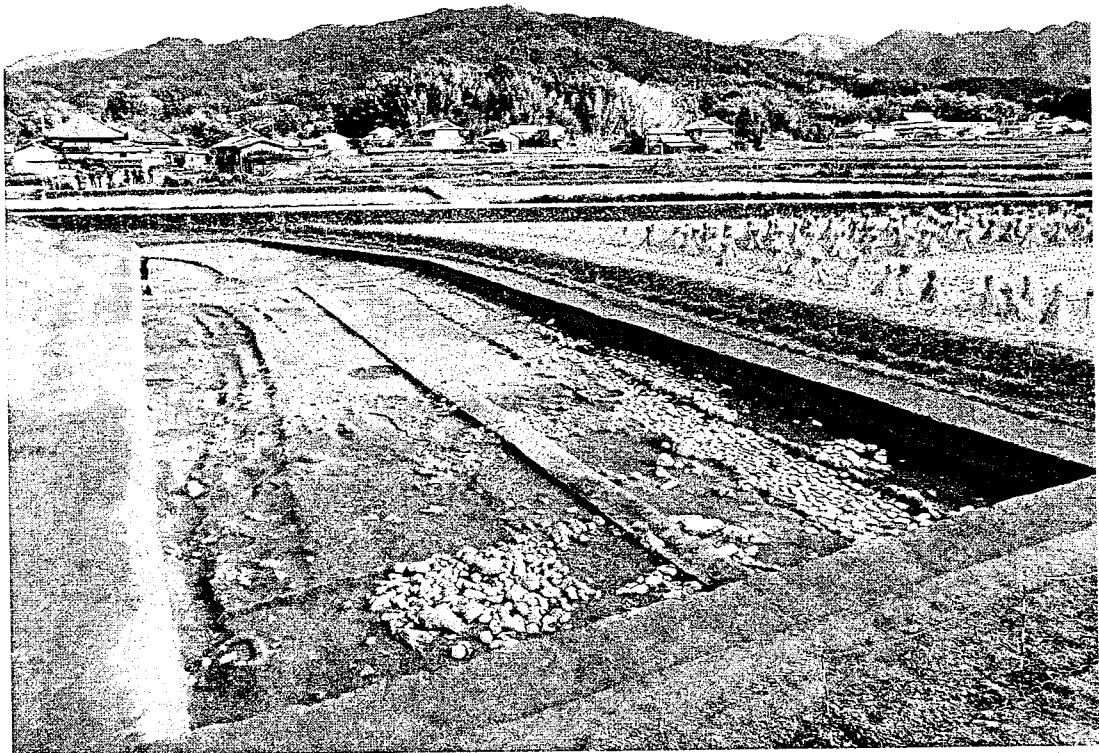
2013

開 会 1:00~

調査報告 1:10~

「飛鳥寺西方遺跡の調査」長谷川 透

「阿部山遺跡群の調査」高橋 幸治



(飛鳥寺西方遺跡全景)

講 演 2:40~

「仏教伝来の頃の飛鳥」

講師 田辺 征夫 氏

明日香村文化財顧問

奈良県立大学特任教授



1. 牽牛子塚古墳 2. 越塚御門古墳 3. 真弓籬子塚古墳 4. 小谷古墳 5. 益田岩船 6. 沼山古墳 7. 与楽古墳群 8. 岩屋山古墳 9. スズミ1号墳
10. スズミ2号墳 11. カツヤマ古墳 12. 真弓ミツツ古墳 13. 真弓テラノメ古墳 14. マルコ山古墳 15. 佐田遺跡群 16. 東明神古墳 17. 佐田2号墳
18. 佐田1号墳 19. 出口山古墳 20. 森カシタニ遺跡 21. 森カシタニ塚古墳 22. 向山1号墳 23. 薩摩遺跡 24. 松山呑谷古墳 25. 清水谷古墳
26. ホラント遺跡 27. 阿部山遺跡群 28. 福村山古墳 29. 観音寺遺跡 30. キトラ古墳 31. 阿部山廃寺 32. 吳原寺跡 33. 檜隈門田遺跡 34. 檜前大田遺跡
35. 檜隈寺跡 36. 坂ノ山古墳群 37. 捨前上山遺跡 38. 御園チシアイ遺跡・御園アライ遺跡 39. 塚穴古墳 40. 高松塚古墳 41. 火振山古墳 42. 中尾山古墳
43. 平田キタガワ古墳 44. 梅山古墳 45. カナヅカ古墳 46. 鬼の俎・雪隠古墳 47. 野口王墓古墳 48. 川原下ノ茶屋遺跡 49. 亀石 50. 西橋遺跡 51. 定林寺跡
52. 菅蒲池古墳 53. 五条野宮ヶ原1号墳・2号墳 54. 五条野向イ古墳 55. 五条野城脇古墳 56. 五条野内垣内古墳 57. 植山古墳 58. 五条野丸山古墳
59. 軽寺跡 60. 石川精舎 61. 榎原遺跡 62. 田中廢寺 63. 和田廢寺 64. 雷丘北方遺跡 65. 大官大寺跡 66. カセヤ塚古墳 67. 庚申塚古墳 68. 山田寺跡
69. 上の井手遺跡 70. 奥山久米寺跡 71. 奥山リウゲ遺跡 72. 雷丘東方遺跡 73. 雷丘 74. 豊浦寺跡 75. 石神遺跡 76. 飛鳥水落遺跡 77. 飛鳥寺西方遺跡
78. 飛鳥寺跡 79. 飛鳥東垣内遺跡 80. 竹田遺跡 81. 小原シウロ遺跡 82. 八釣・東山古墳群 83. 東山マキド遺跡 84. 金鳥塚古墳 85. 飛鳥池工房遺跡
86. 酒船石遺跡 87. 飛鳥京跡 88. 飛鳥京跡苑池 89. 甘徑丘東麓遺跡 90. 川原寺裏山遺跡 91. 川原寺跡 92. 橋寺跡 93. 東橋遺跡 94. 島庄遺跡
95. 石舞台1~4号墳 96. 石舞台古墳 97. 馬場頭古墳群 98. 打上古墳 99. 都塚古墳 100. 戒成組田古墳 101. 坂田寺跡 102. 飛鳥稻淵宮殿跡
103. 塚本古墳 104. 朝風廢寺 105. 福淵ムカダ遺跡

飛鳥地域周辺遺跡分布図 (1 : 25000)

飛鳥寺西方遺跡の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字飛鳥
調査原因：範囲確認調査
調査面積：362.5 m²
調査期間：平成 25 年 7 月 18 日～12 月 25 日

1. はじめに

この調査は、飛鳥寺の西側一帯に広がる飛鳥寺西方遺跡の範囲と構造を明らかにすることを目的として、平成 20 年度から実施している範囲確認調査である。今回の調査地は、飛鳥寺西門から西へ約 100m の位置である。飛鳥寺の寺域の外側にあたり、飛鳥寺西門跡からみて西側正面に位置する。

飛鳥寺西側一帯は、『日本書紀』に度々登場する「飛鳥寺西槻」の地に推定されている。この「飛鳥寺西槻」では、壬申の乱時には軍営が置かれ、蝦夷や隼人などの辺境の人々への饗宴が行われたと記されている。ほかにも、大化の改新前夜に、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った場所とも考えられている。これら文献史料の研究成果によって、この地域には、槻の樹があり、大勢の人々を集めて饗宴や軍営を置くことができる空間、「槻樹の広場」が広がっていたと推測されている。

飛鳥寺西方地域は、これまでに奈良文化財研究所や奈良県立橿原考古学研究所（以下橿考研）、明日香村教育委員会（以下村教委）によって発掘調査が行われてきた。調査地周辺では、橿考研と村教委による既往の調査がある。橿考研は本調査区の南側で飛鳥京第 77 次調査を実施し、調査区東半において南北方向に展開する掘立柱塀や石組溝を検出した。また、飛鳥寺西門から西に 120 m 付近で行われた飛鳥京第 167 次では、西門へ延びる参道とみられる石敷を検出した。一方、村教委は、平成 20 年度に調査地の北側で調査を実施し、飛鳥川の旧氾濫跡を確認した。このように、調査地周辺は飛鳥川による氾濫の影響を受けやすく、遺構が良好に遺存しにくい環境であることがわかっている。

今回実施した調査地は、飛鳥寺西方遺跡の中心地付近とみられ、昨年明らかとなった石敷等の広がりを確認し、槻樹の広場に関連する遺構や飛鳥寺西門の参道に関わる遺構の検出が予想された。

2. 層序と検出遺構

層位は、調査区の東側と西側で異なる。調査区の東側では水田の耕作土直下（地表下約 20 cm）で砂利敷面となる。一方、調査区の西側では、耕作土以下、床土、平安～鎌倉時代の遺物包含層が堆積し、地表下約 70 cm で飛鳥時代の遺構検出面となる。また、検出面の下層は、飛鳥時代の整地層、古墳時代以前の遺物包含層、砂礫層が堆積している。最下層である砂礫層は、起伏が認められ、部分的に整地土が非常に薄い部分も認められた。遺構検出は砂利敷層でおこなった。

今回検出した遺構は石敷、砂利敷、穴、素掘溝である。

石組溝

調査区南側で検出した石組溝である。構造は幅 1.3m にわたって石を敷き詰めた底溝底部とその両側に立てた側石からなる。側石はその南北で遺存状態が大きく異なり、南側はよく遺存するが、北側の側石は 2 石分残るのみで、その大半は抜き取られていた。残りの良い南側石から判断して、石組溝の深さは約 15 cm である。東が高く西が低い地形に合わせて東西に敷設され、遺構の東西 25m の間で高低差が約 10 cm ある。石組溝の方位は東西の正方位から東で南に 4° ほど振っ

ている。底石は、上面が平坦な石をもちいているが、石の大きさには 13~18 cm大のものと 20~30 cm大とがある。また、石の敷き詰め方にも粗密が認められる。このような石の大小、敷き詰め方の差異には直線状に石の目地が通っており、なんらかの作業単位を示している。石組溝の南側には敷石を施し、溝に連なるテラス状の遺構と考えられる。

砂利敷

調査区の東側にある砂利敷である。遺存状態はよくなく、調査区東半にのみ残る。3~10 cm大の小石や砂利を敷き詰め、南東から北西にかけて低くなる地形に沿って一面に施されたとみられる。昨年検出した砂利敷き面と比高差 40 cmあり、昨年調査区と今年度調査区との間に段差を設けられていた可能性がある。

穴

調査区の北側で検出した穴である。調査区の東側に 6 基、西側に 7 基あり、東西方向に並ぶ。石組溝の北 6.5mの位置で東西方向に並び、石組溝と平行する。埋土は橙色土や焼土からなる。規模は 33~116 cmで、平面形は円形や長楕円形などいずれも整っていない。穴は芯心で 2.4~2.7 mの不等間隔である。一列に並ぶ塀や柵列の柱抜き取り穴である可能性があるが、2 間分欠落しているため、未調査の調査区北側に展開する掘立柱建物の可能性も考えられる。未調査地の成果を待って判断したい。

素掘溝は、調査区の北側で顕著に認められ、上層から掘りこまれた溝で、飛鳥時代以降に掘削された素掘溝である。東西方向にのびるが、いずれも東側に延びるにつれ北側に屈曲する。

なお、調査区から土師器、須恵器、瓦、黒色土器などが少量出土した。時期を特定できる遺物はわずかである。

3・まとめ

今回の調査の結果、飛鳥寺西門から西に約 100m付近において、飛鳥時代から古代の石組溝、砂利敷、穴を検出した。今回の砂利敷が昨年度検出された砂利敷と一連であることから、砂利敷がさらに西側に広がることになり、飛鳥寺西門から西側一帯は石敷・砂利敷を広範囲にわたって施していたことがわかった。

また、東西に展開する石組溝や穴は、隣接する昨年度調査区で延長部分が確認できないため、西門まで延長する遺構ではないと考えられる。石組溝は構造と方位からみてそれ自身が飛鳥寺の参道とは考えにくい、東西での高低差や南側に残る敷石の存在から排水溝ないし区画溝であると考えられる。また、穴については、これと関連する遺構が周辺の調査でも確認されていないことから、未調査地である調査区北側に展開している可能性が高い。この遺構は次年度の調査の進展を待って検討したい。いずれにせよ、これらの遺構が飛鳥寺に直接付属する遺構とは考えにくく、いわゆる「槻樹の広場」に関連する遺構と考えられる。これまで槻の樹の広場は飛鳥寺西門の西側一帯を南北約 200m、東西約 120mにわたって広がると推定されてきたが、今回の調査によってその東西の広がりが確実となった。飛鳥寺西方を砂利敷や石組溝で広範囲に整備していた状況が明らかとなり、遺跡の範囲を検討する上で重要な成果を得ることができた。しかし、これらの遺構の年代や変遷、配置や構造など不明な点も多く、今後の検討課題も残る。今後の調査の進展により飛鳥寺西側一帯の全容解明が期待される。

「飛鳥寺西槻」に関する史料(『日本書紀』)

① 皇極三年(644)正月・・・大化の改新(乙巳の変)前

中臣鎌子連、(中略) 偶に中大兄に、法興寺の槻樹の下に、打毬の侶に預りて、皮鞋の毬の隨に脱げ落つるを候りて、掌中に取置ちて、(後略)

② 孝徳即位前紀大化元年(645)六月・・・大化の改新(乙巳の変)直後

天皇、皇祖母尊、皇太子、大槻樹の下に群臣を召集めて盟はしめたまふ。

③ 齊明三年(657)七月

須彌山の像を飛鳥寺の西に作る。且つ孟蘭盆会を設く。暮に都賀邏人に饗たまふ。

④ 齊明5(659)年三月

甘檮丘の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。

⑤ 天武元年(672)六月・・・壬申の乱

爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穗積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の下に據りて營を為す。(中略) 爰に百足馬に乗りて緩く来れり。飛鳥寺の西の槻の下に逮るに、(後略)

⑥ 天武六年(677)年二月

是の月、多禰島人等に飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。

⑦ 天武九年(680)七月

飛鳥寺の西の槻の枝、自ら折れて落つ。

⑧ 天武十年(681)九月

多禰島の人等に飛鳥寺の西の河邊に饗し、種種の樂を奏す。

⑨ 天武十一年(682)七月

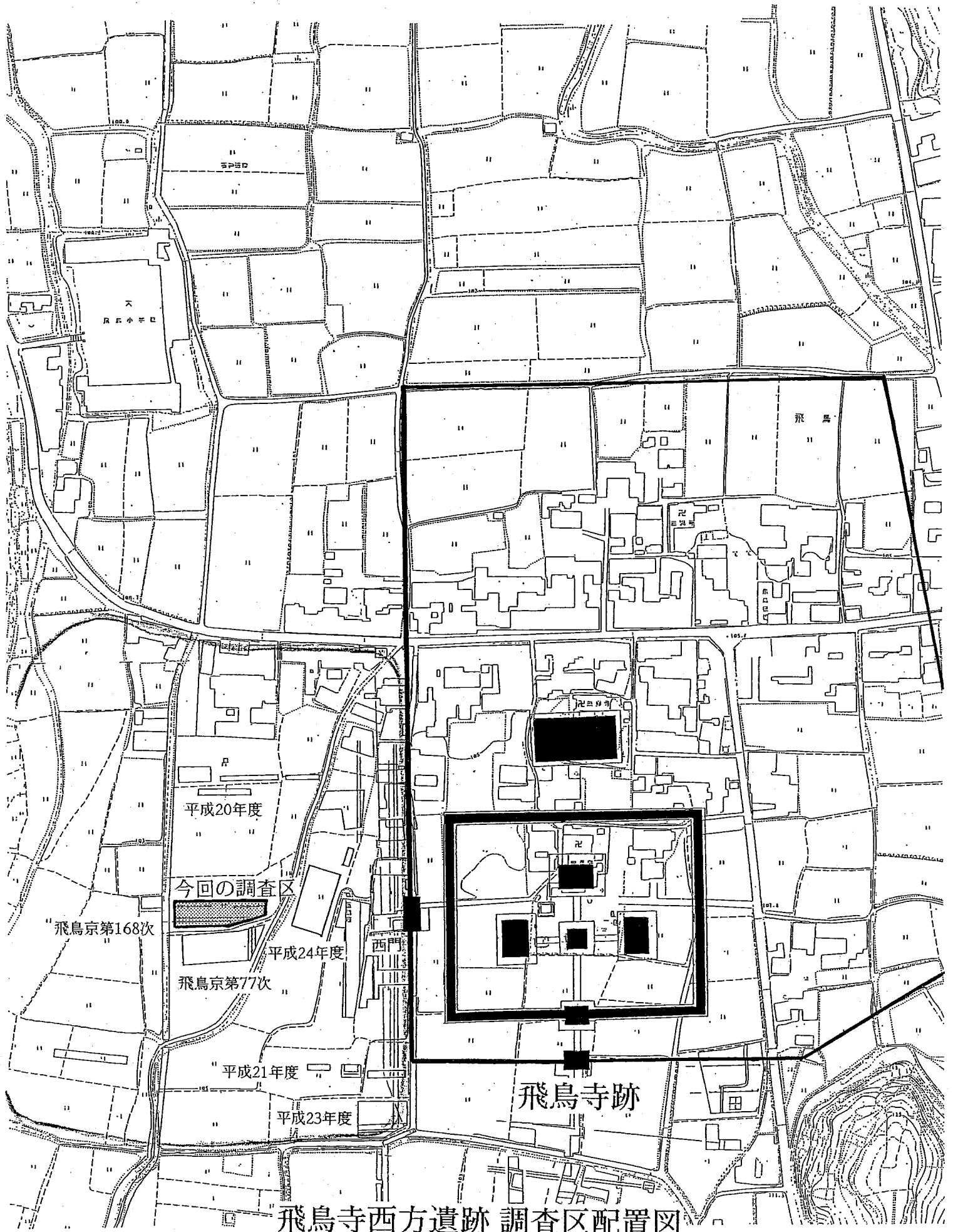
隼人等に飛鳥寺の西に饗へたまひ、種種の樂を発す。

⑩ 持統二年(688)十二月

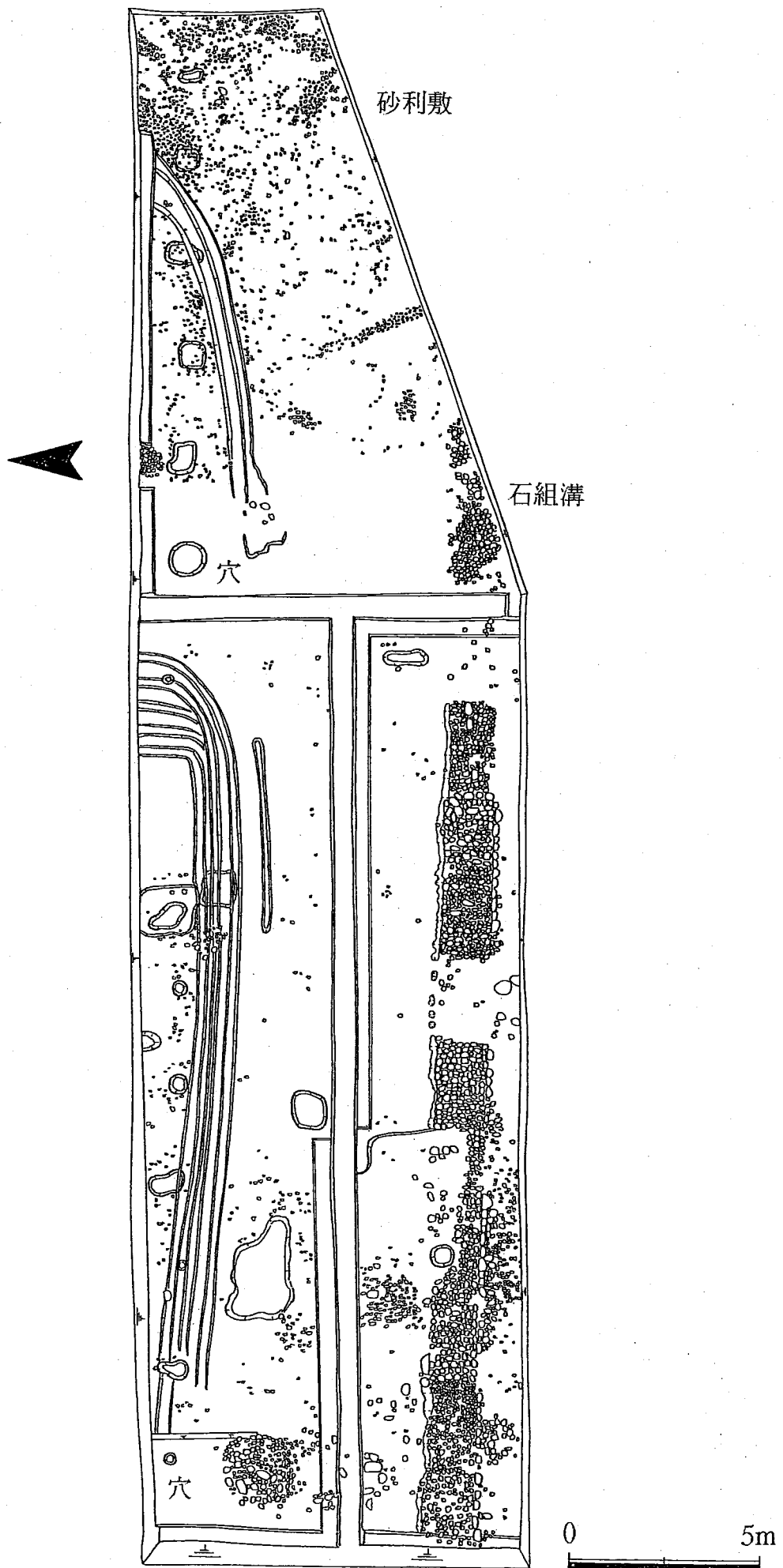
蝦夷の男女二百一十三人を飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。

⑪ 持統九年(695)五月

隼人の相撲を西の槻の下に観したまふ。



飛鳥寺西方遺跡 調査区配置図



飛鳥寺西方遺跡 遺構平面図(S=1/150)

阿部山遺跡群の調査

調査地：奈良県高市郡明日香村大字阿部山

調査原因：範囲確認調査、県営農地基盤整備事業にともなう調査、農地造成にともなう調査

調査面積：範囲確認調査計 500 m²、整備事業にともなう調査 3608 m²、造成にともなう調査 44 m²
総面積約 4152 m²

調査期間：◆範囲確認調査○平成 20 年度/平成 20 年 5 月 12 日～12 月 24 日○平成 21 年度/平成 21 年 4 月 20 日～8 月 31 日◆整備事業にともなう調査○平成 22 年度/平成 22 年 12 月 16 日～平成 23 年 3 月 31 日○平成 23 年度/平成 23 年 8 月 1 日～平成 24 年 3 月 29 日○平成 24 年度/平成 24 年 5 月 21 日～10 月 17 日○平成 25 年 1 月 7 日～3 月 21 日/平成 25 年度/平成 25 年 7 月 20 日～12 月 11 日◆農地造成にともなう調査○平成 25 年 6 月 24 日～7 月 5 日

1. はじめに

阿部山遺跡群の発掘調査は、主に二つの事業に起因して行ったものに分けられる。一つは範囲確認調査、もう一つは県営農地基盤整備事業である。範囲確認調査は2カ年、県営農地基盤整備事業にともなう発掘調査は4カ年にわたって行った。範囲確認調査では約 500 m²、農地基盤整備事業の対象地内では 3608 m²を調査した。発掘調査に先立って、奈良県立橿原考古学研究所および明日香村教育委員会文化財課が、遺跡の有無を確認するための踏査を行っている。基盤整備事業にともなう発掘調査が行われる前段階において、丘陵頂部を中心に古墳や古墓の可能性が高い箇所に関しては、範囲確認調査として発掘調査を行った。今回の資料は基本的に農地基盤整備事業にともなう発掘調査に関連するものであるが、遺跡の地域的なまとまりの性格上、これまでの範囲確認調査による発掘調査成果も盛り込んでいる。

阿部山遺跡群の立地する明日香村大字阿部山の地域における本格的な発掘調査は、さほど多くない。これまでの本格的な発掘調査は、キトラ古墳やホラント遺跡におけるそれがあるにすぎない。キトラ古墳の発掘調査としては、壁画の剥ぎ取りなどに代表される一連の調査があり、7世紀末に築かれた終末期古墳の様相が詳細に明らかとなった。ホラント遺跡の発掘調査は、県道の敷設が原因となった発掘調査で、奈良県立橿原考古学研究所が行っている。この発掘調査では石敷遺構、大壁遺構、石組溝などが検出された。いずれも7世紀後半の遺構であり、この地域にも飛鳥時代の遺跡が広がっていることを明らかにすることができた。

2. 層序

谷状地形の堆積と丘陵頂部付近における堆積は、その状況も土質も自ずと異なる。谷状地形では約 2 m に近い堆積をともなった箇所においても地山は検出されていない。この地形における堆積土は、かなり粘性が高く、高密度の土質である。一方で丘陵頂部付近に設定した調査区では地山検出面までの堆積が浅く、粘性、密度ともに低い土質であることが多かった。

3. 主な遺構と遺物

主な遺構を時代ごとに述べる。縄文・弥生時代の遺構は検出されていない。古墳時代の遺構として竪穴住居・掘立柱建物・土坑・木棺直葬墓・横穴式石室がある。飛鳥時代の遺構には、掘立柱建物があった。平安時代の塀、鎌倉時代の掘立柱建物・土坑・集石遺構・土器溜まり、江戸時代の杭列、昭和時代の炭窯がある。遺物は土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器・瓦質土器・黒色土器・瓦器・白磁・青磁・陶磁器・瓦・銭貨・馬具・鉄釘・ミニチュア炊飯具などが出土した。竪穴住居・土坑から出土した土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器は古墳時代中期のものが多い。なお調査回数ごとに、これまでの調査とその成果を一覧表にしてまとめた(表1)。あわせて参照して頂きたい。

竪穴住居

2012-1次調査で明らかとなったものが2棟ある。うち残存する検出面積が広く、遺物が多かったものを図化した(図2)。住居は12区中央付近で1棟、12区西側付近で1棟検出している。竪穴住居1は、掘形の平面プランが隅丸方形。規模は4.5×4.5m、深さ0.15~0.2mである。掘形東側の壁際中央付近では焼土塊を検出した。これら焼土塊の周辺には炭化物や土器が出土している。この焼土塊は、消失した竈の残骸と思われる。竪穴住居内の埋土は、明黄褐色土を中心とする。溝2によって切られることから、これよりも時期的には古い。埋土中からは土師器、須恵器、韓式系土器などが破片で出土した。これらの出土土器から、竪穴住居1は古墳時代中期に埋没した可能性が高い。

掘立柱建物

阿部山遺跡群で検出した掘立柱建物は4棟である。古墳時代の建物1棟、飛鳥時代の建物1棟、中世の建物2棟を検出した。古墳時代の建物は南北4間以上、東西2間で、2012-1次調査12区における検出である。飛鳥時代の建物は南北3間、東西3間以上。2011-5次調査の7区で検出した。中世の建物は2棟検出している。2012-1次調査17区で検出した建物は、南北が2間以上、東西が4間であった。同じく18区において検出した建物は南北4間以上、東西2間である。

土坑

2012-1次調査、12区で検出した土坑である(図3)。竪穴住居1の北側において検出した。平面プランは、やや縦長の不整形で、規模は検出長1.5m、幅1mである。深さ約0.1m分が残存する。掘形内埋土は明黄褐色土を中心とする。遺物は土師器、須恵器、韓式系土器、製塩土器などが出土している。土坑周辺では径5cmの円形の杭跡を検出しており、土坑と関連する一連の遺構である可能性が考えられる。

土器溜まり

2012-1次調査、18区において検出した落ち込みである。調査区西側で検出した。遺物の出土状況から、土器のまとまりは4群に分かれる。出土した土師器皿、瓦器椀ともにほぼ平均的に出土している(図4)。51点の土師器皿、7点の瓦器椀を図化した。掘立柱建物3と重複する位置で検出している。土器の散見される範囲は東西3.5m、南北1.5m分。深さは、深い所で0.2mであった。これらの土器は4箇所のみとして出土している。器種は土師器皿・瓦器椀がほとんどである。土師器皿も瓦器椀もほぼ偏りなく出土しているが、土師器皿は、西側の一群が最も多い。形態差や法量差による出土状況の差についても顕著ではなく、ほぼ均一的な出土状況を呈している。

4. まとめ

これまでの調査を振り返ってみた。範囲確認調査では古墳や古代の墓などが検出されている。古墳の埋葬主体は木棺直葬および横穴式石室で、馬具・鉄釘・ミニチュア炊飯具などが出土している。馬具は、楕円形鏡板付轡を含むものであり、5世紀後半~6世紀初頭に用いられたものと考えられている。古墳時代の集落としては、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、土坑1基などを検出した。出土した土器には土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器などがあり、これらの土器は古墳時代中期の様相を呈している。土坑出土の土器は、須恵器杯が5世紀後半~6世紀初頭の年代を与えられることから、集落がこの時期に営まれていたことを示す。古墳時代に関して言えば、これまでの調査で明らかとなった古墳、その経営母体となる集落が、ほぼ同時期にさほど距離をもちず営まれていたことが明らかになった。したがって、この時期に限って言えば、古墳と集落は調査地周辺でまとまる一つの集団が生活を営み、古墳を造営している可能性が高い。その時期は5世紀後半~6世紀初頭であろう。飛鳥時代は掘立柱建物を中心に居住域を形成する。残念ながらこの時期の墳墓は検出されていないが、事業対象地付近においても調査区を設けていない丘陵地が存在することから、今後こういった場所で検出される可能性は大きい。いま一つ気掛かりなのは、当遺跡とキトラ古墳との関係性である。キトラ古墳は、7世紀末頃の築造時期が考えられているが、今回の調査では、この時期の遺構・遺物が少なかった。造営主体はどこなのかを探る研究は少ない。さらなる周辺での調査を待って、資料の増加に期待したい。

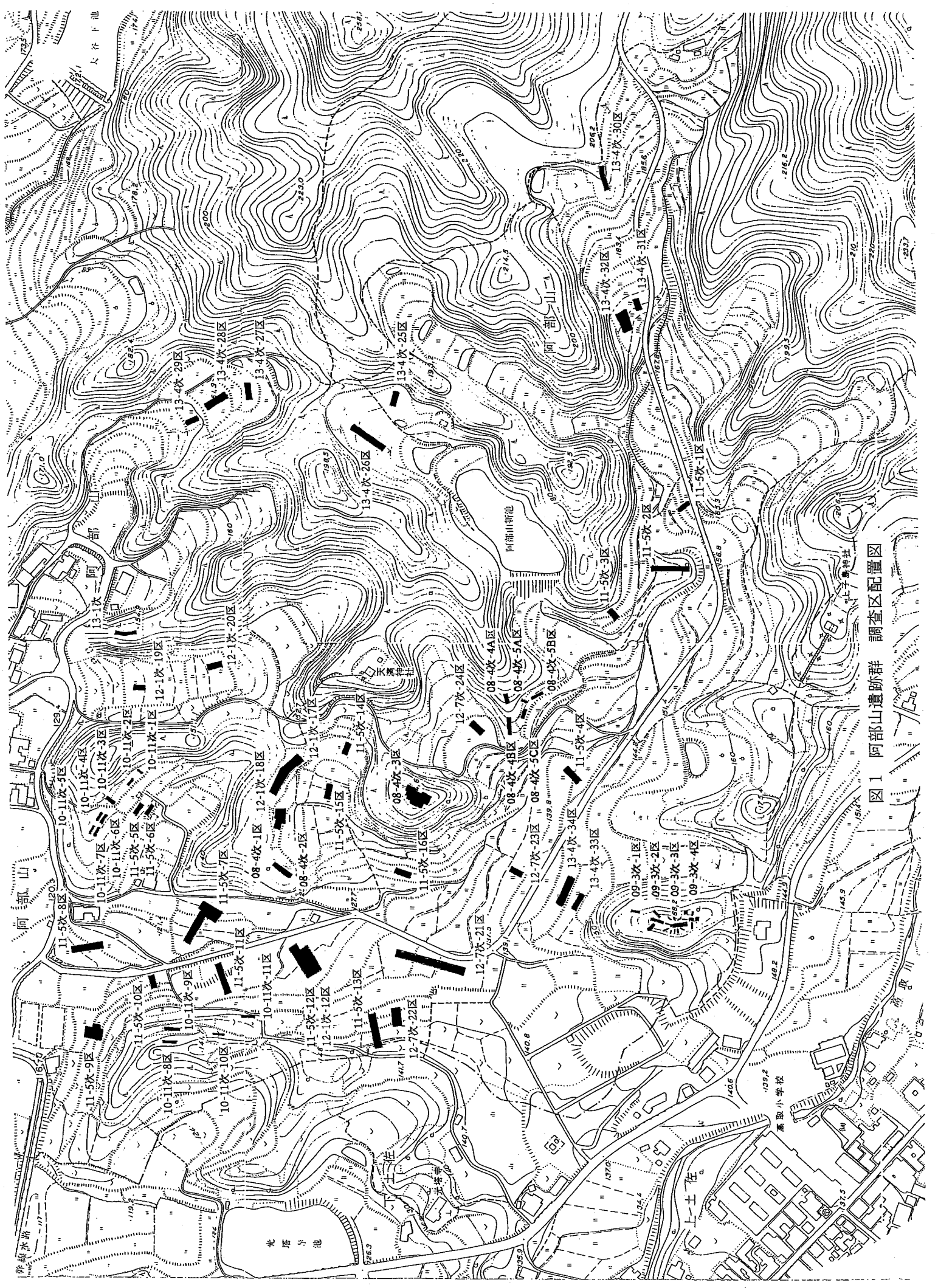


図1 阿部山遺跡群 調査区配置図

表1 阿部山遺跡群発掘調査一覧表

調査年度・回数	調査原因	調査期間	調査区	調査面積	主な遺構	主な遺物	担当者		
2008-4次 (20年度)	範囲確認調査	2008年5月12日 ～12月24日	1区	—	集石遺構	—	西光		
			2区	—	方墳木棺直葬墓	—			
			3区	—	方形墳木棺直葬墓	青磁椀・土師器皿・鉄釘			
			4-A区	—	—	—			
			4-B区	—	—	—			
			5-A区	—	—	—			
			5-B区	—	—	—			
			5-C区	—	—	—			
		約7カ月10日	合計	300㎡					
2009-3次 (21年度)	範囲確認調査	2009年4月20日 ～8月31日	1区	14㎡	—	—	長谷川		
			2-A区	—	木棺直葬墓	須恵器			
			2-B区	—	—	—			
			2-C区	—	—	—			
						計	42㎡		
			3-A区	—	横穴式石室・火葬墓	土師器・須恵器・ミニチュア炊飯具・瓦器・白磁・鉄釘・馬具・銀釧	長谷川		
			3-B区	—	—	—			
			3-C区	—	—	—			
			3-D区	—	—	—			
			3-E区	—	—	—			
			3-F区	—	溝	—			
			3-G区	—	—	—			
			3-H区	—	—	—			
			3-I区	—	—	—			
			3-J区	—	—	—			
						計	90㎡		
4-A区	—	横穴式石室	須恵器・ミニチュア炊飯具・鉄釘・馬具	西光					
4-B区	—	墳裾	—						
4-C区	—	溝	—						
4-D区	—	墳裾	—						
4-E区	—	墳裾	—						
			計	1㎡					
		約4カ月10日	合計	約200㎡					
2010-11次 (22年度)	県営農地基盤整備事業	2010年12月16日 ～2011年3月31日	1区	10㎡	—	土師器・須恵器・陶磁器・瓦	長谷川		
			2区	14㎡	溝	土師器・須恵器・陶磁器・瓦			
			3区	30㎡	—	土師器・須恵器・陶磁器			
			4区	35㎡	—	—	高橋		
			5区	28㎡	—	—			
			6区	20㎡	—	—			
			7区	30㎡	—	—			
			8区	15㎡	—	土師器・瓦器・陶磁器			
			9区	30㎡	—	土師器・瓦器・陶磁器・瓦	長谷川		
			10区	22㎡	—	土師器・陶磁器			
			11区	11㎡	—	土師器・陶磁器・瓦			
						合計		243㎡	
2011-5次 (23年度)	県営農地基盤整備事業	2011年8月1日 ～2012年3月29日	1区	51㎡	—	—	高橋		
			2区	144㎡	ピット	土師器・須恵器			
			3区	34.5㎡	—	—			
			4区	46.5㎡	—	—			
			5区	24㎡	—	土師器・須恵器・瓦質土器・瓦器・陶磁器			
			6区	16㎡	—	土師器・瓦器			
			7区	264.5㎡	掘立柱建物、掘立柱塼、ピット	土師器・須恵器・黒色土器・陶磁器・瓦			
			8区	120㎡	石敷	—			
			9区	114㎡	落込み	土師器・須恵器・瓦器・瓦			
			10区	24㎡	—	土師器・須恵器・銭貨			
			11区	97.5㎡	—	土師器・須恵器・瓦器・瓦			
			12区	140㎡	掘立柱建物、ピット	土師器・須恵器・瓦器			
			13区	126㎡	—	土師器・須恵器・瓦器			
			14区	28.5㎡	—	—			
			15区	40㎡	杭列	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・銭貨			
						合計		1290.5㎡	
2012-1次 (24年度)	県営農地基盤整備事業	2012年5月21日 ～10月17日	12区	295㎡	掘立柱建物、竪穴住居、土坑、溝	土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器	高橋		
			17区	325㎡	掘立柱建物、土坑、集石遺構、炭窯	土師器・須恵器・瓦質土器・瓦器・瓦			
			18区	130㎡	石積、土器溜まり	土師器・瓦器			
			19区	60㎡	—	—			
			20区	85㎡	—	—			
						合計		895㎡	
2012-7次 (24年度)	県営農地基盤整備事業	2013年1月7日 ～3月21日	21区	325㎡	—	土師器・須恵器・瓦器・瓦	高橋		
			22区	60㎡	掘立柱塼、溝	土師器・須恵器・韓式系土器・瓦器・陶磁器・瓦			
			23区	65㎡	溝	—			
			24区	25.5㎡	—	—			
			合計	475.5㎡					
2013-1次 (25年度)	農地造成	2013年6月24日 ～7月5日		44㎡	—	—	高橋		
2013-4次 (25年度)	県営農地基盤整備事業	2013年7月20日 ～12月11日	25区	175㎡	—	—	高橋		
			26区	21㎡	—	—			
			27区	36㎡	—	—			
			28区	105㎡	—	—			
			29区	90㎡	—	—			
			30区	66㎡	—	—			
			31区	32㎡	—	—			
			32区	50㎡	—	—			
			33区	45㎡	ピット 土器溜り	土師器・須恵器			
34区	84㎡	ピット	土師器・須恵器						
			合計	704㎡					

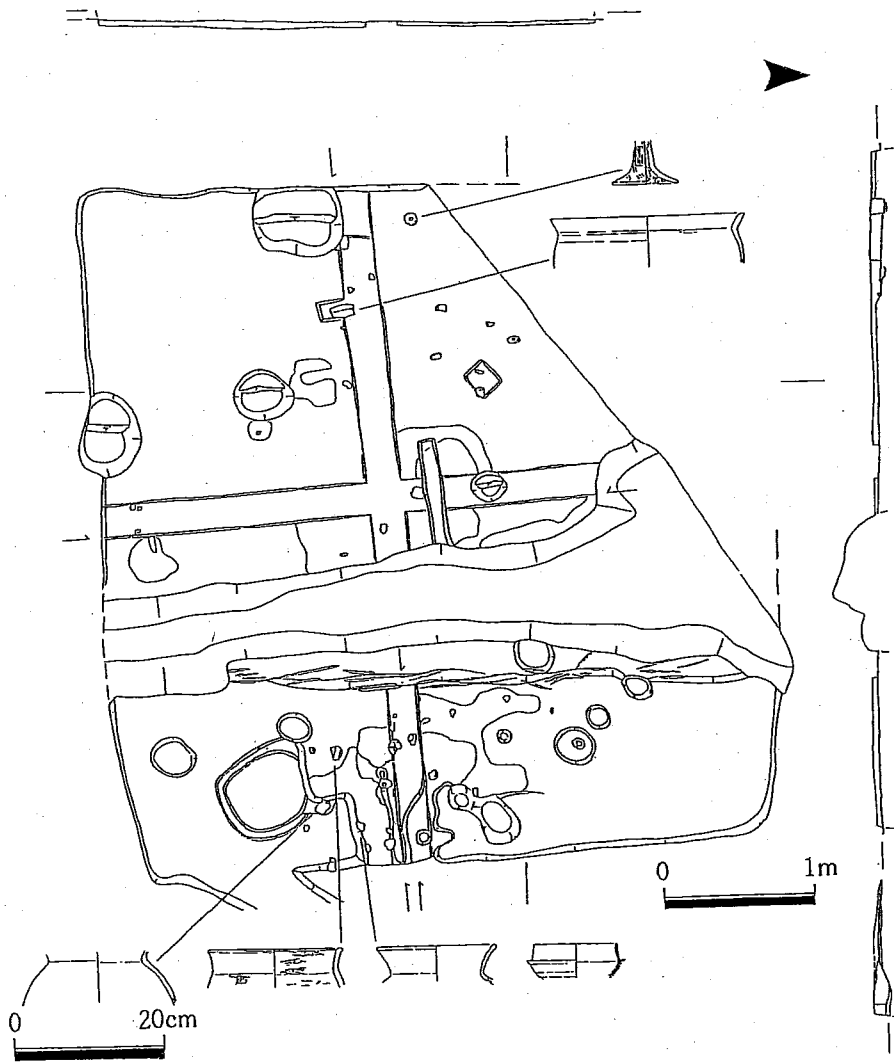


図2 阿部山遺跡群12区竪穴住居1平・断面および遺物出土状況

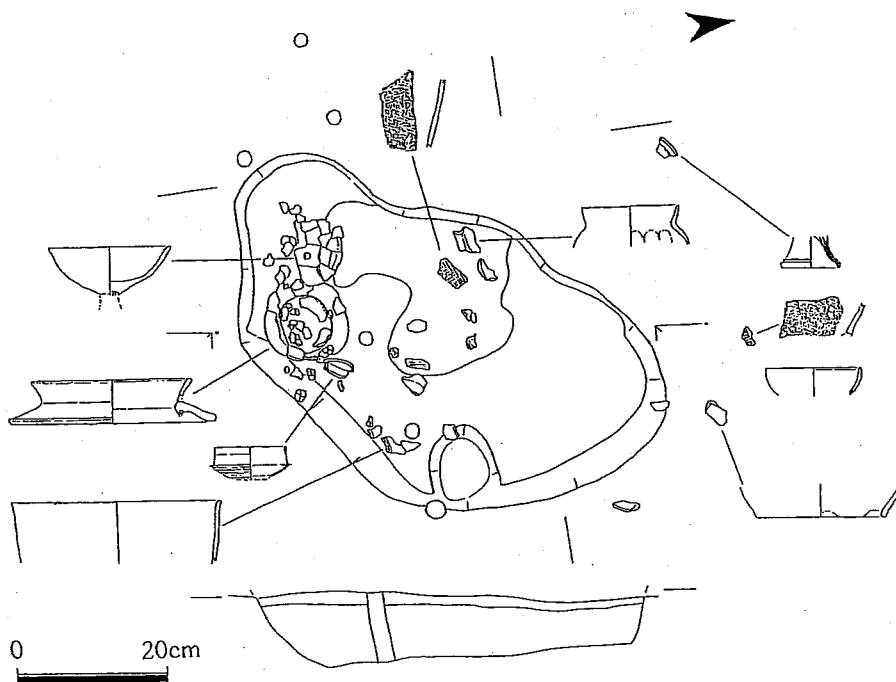


図3 阿部山遺跡群12区土坑1平・断面および遺物出土状況

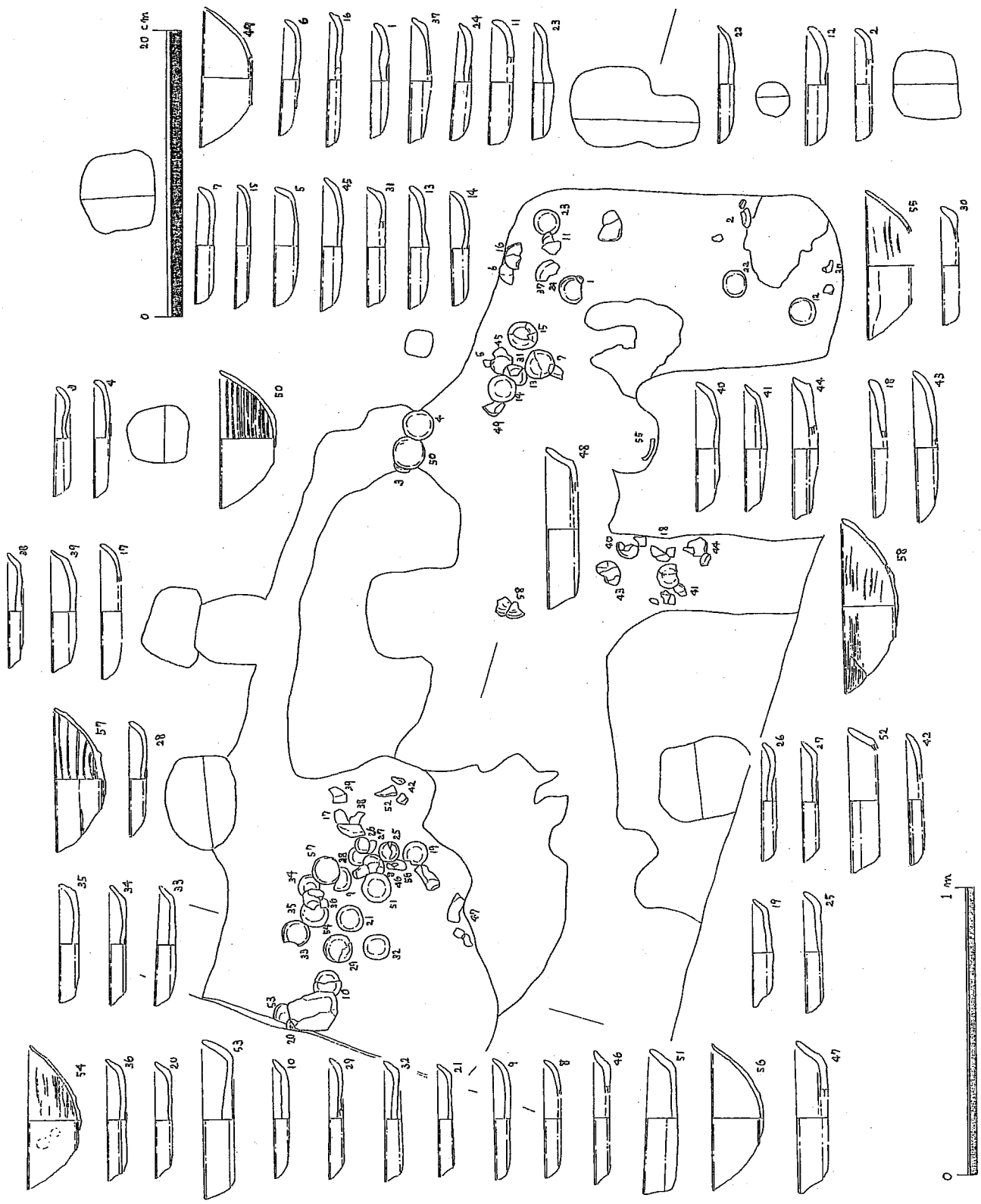


図4 阿部山遺跡群 18区土器溜まり1遺物出土状況

講 演

「仏教伝来の頃の飛鳥」

明日香村文化財顧問

奈良県立大学特任教授

田辺 征夫 氏

仏教伝来の頃の飛鳥

田辺征夫

明日香村

2014年2月15日(土)

古墳時代と飛鳥時代を峻別する大きな違いの一つは仏教である。東アジアの厳しい国際情勢の中で、確固たる地位を確保するために大和朝廷は天皇を頂点とする新たな統一国家を確立しようとした。その思想的支えとして取り入れたのが宇宙観・世界観をもった仏教であった。しかし、その受容の道筋は決して単純ではなかった。

1. 仏教伝来のこと

1) 仏教公伝の記事

- ・百濟聖明王が金銅仏などを献じたのを公伝とする
 - 538年説と552年説あり
 - 公伝とは正式に國に仏教が伝えられたこと

2) 古い伝承の寺院

- ・仏教公伝より古い伝承を持つ寺院がある
- ・飛鳥寺より古い伝承の仏堂がある
 - 仏教は渡来系氏族を中心に個別に入ってきたことを示す

3) 7世紀以前の仏教遺品

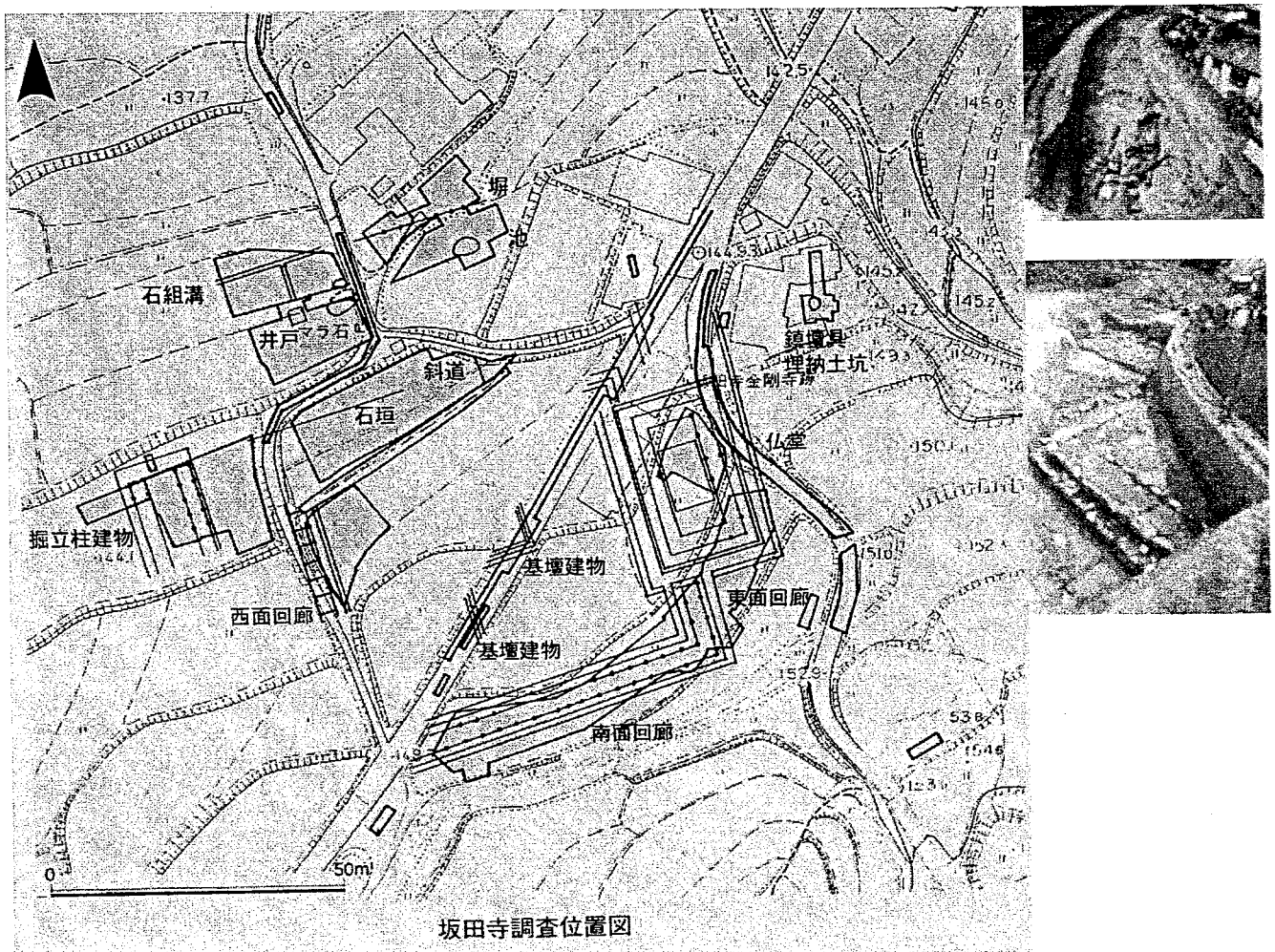
- ・法隆寺48体仏等には6世紀伝来と考えられるものがある
- ・古墳出土鏡に仏獣鏡がある

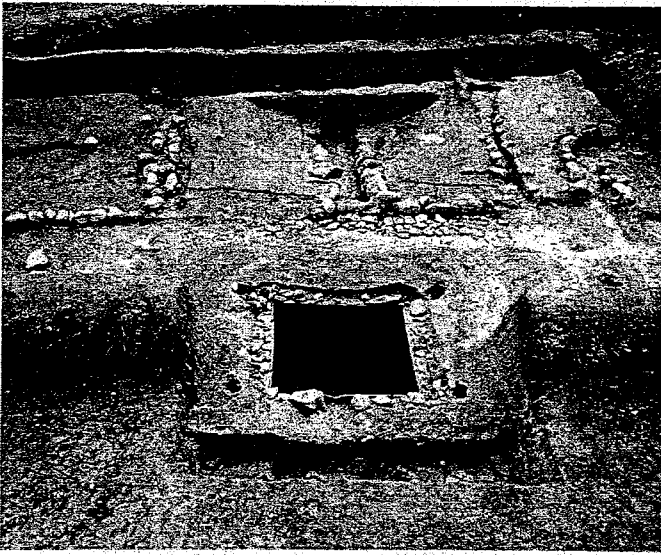
西曆元 西曆 記 事 文 獻

522	繼體16	日吉山藥師法華驗記云、延曆寺僧肇記云、第廿七代繼體天皇即位十六年壬寅、唐漢人鞍部村主司馬遠止、此年春二月入朝、即結草堂於大和國高市郡坂田原、安置本尊佛依礼拜、卒世皆云、是大唐神之出縁起（『扶桑略記』欽明十三年案）
*538	宣化3	（『日本書紀』欽明13年、「百濟聖明王、仏像・経論を獻じること」の仏教公伝の記事を、『法王帝説』では欽明天皇戊午年、『元興寺縁起』では欽明天皇7年戊午年とするが、欽明朝に戊午年はない）
552	欽明13	百濟聖明王、遣西部姫氏、達率怒斯致契等、獻釈迦仏金銅像一軀、幡蓋若干卷、（中略）聖明王からの別表に仏教の傳れた点が解き記してあること、天皇が感心して取り入れるかどうかを群臣に計ったこと、物部大連尾與と中臣連鎌子とが百八十の国神が怒るといつて反対したこと、そこで試みた蘇我稲目に授け敬ってみること、などを記す）、安置小梨田家、勤修出世業為寺。（後略）その後疫病が起こり、民が多敷死んだため尾與や鎌子らは仏像を捨てよと主張、役所が難波の堀江に流し捨て、御廬を焼き尽くすと、天に風雲が無くなり、磯城島宮の大殿にも火災が発生した。）（書紀）
577	敏達6	百濟国王（威徳王）、付遣使大別王等獻経論若干卷、並律師、禪師、比丘尼、造寺工、造仏工、六人、遂安置難波大別王寺（書紀）
579	敏達8	新羅遣使叱政奈未進調、並送仏像（書紀）
584	敏達13	從百濟來鹿深臣、有弥勒石像一軀、佐伯連、有仏連、有仏像一軀、是歲、蘇我馬子宿禰、請其仏像二軀、乃遣鞍部村主司馬遠等、池邊直米田、使於四方、訪覓修行者、於是唯於播磨國、得僧選俗者、名高龍惠使、大臣乃以為師、令度司馬達等女島、曰善信尼（年十一歳）、又度信尼弟子二人、其一漢人夜菩之豊女、名曰種藏尼、其二、錦織重之女石女、名曰惠善尼、馬子猶依佛法崇敬三尼、乃以三尼付水田直與達等、令供衣食、經營仏殿於宅東方、安置弥勒石像、屈請三尼、入会設斎、此時達等得仏舍利於斎食上、即以舍利、獻於馬子宿禰、馬子宿禰試以舍利置鐵質中、振鐵鎚打、其質與鎚悉被摧壞、而舍利不可摧毀、又按舍利於水、舍利隨心所願浮沈於水、由是馬子宿禰、池邊米田、司馬達等、保信佛法、修行不懈、馬子宿禰亦於石川宅修治仏殿佛法之初自此而作。（書紀）
585	敏達14	蘇我大臣馬子宿禰、起塔於大野丘北、大会設斎、即以達等前所獲舍利、礙塔柱頭（書紀）
587	用明2	天皇之舊帳盛、鞍部多須奈進而奏曰、臣奉為天皇出家修道、又奉造丈六像及寺、天皇為之悲勸、今南淵坂田寺木丈六像、挾持菩薩是也、癸丑、天皇崩於大殿（書紀）
588	崇俊1	七月、蘇我馬子宿禰大臣、勸諸皇子與群臣、謀滅物部守屋大連、（中略）、平乱之後、於摂津國、造四天王寺、分大連奴半與宅、為大寺奴田庄（書紀）
592	崇俊5	百濟遣使並僧惠總令斤惠是等、獻仏舍利、百濟國遣恩崇信信德率蓋文那率福常味身等、進調併獻仏舍利、僧哈律律師令威惠衆惠宿道嚴舍開等、寺工太良未太文買古子、鑿盤博士將德博味淳、瓦博士麻奈文致陽貴文凌貴昔麻帝彌書工白加、（中略）撰飛鳥衣縫造樹葉之家、始作法興寺（書紀）
593	推古1	起大法興寺仏堂與歩廊（書紀）
596	推古4	以仏舍利、置于法興寺刹柱礎中、丁巳、建刹柱、（中略）、始造四天王寺於難波荒陵（書紀）
598	推古6	法興寺造竟、則以大臣男善德臣拜寺司、是日、慧慈慧聰二僧、始住於法興寺（書紀）
603	推古11	四月十五日、小治田天皇、請上宮王、令講勝曇經、其儀如僧也（中略）天皇布施聖王物、播磨國田保郡佐勢地、五十萬代、聖王即以此、為法隆寺地也（上宮聖德法王帝説）
606	推古14	皇太子謂、諸大夫曰我尊有尊仏像、誰得是像以恭拜、時秦河勝進曰、臣拜之、便受仏像、因以造蜂岡寺（書紀）
607	推古15	銅鑄丈六仏像並造竟、是日也、丈六銅像坐於元興寺金堂、高於金堂戸、以不得納堂、於是、諸工人等議曰、破堂戸而納之、然較作鳥之秀工、不鑿戸得入堂、（中略）、勅鞍作鳥曰、朕欲興隆內典、方將建仏刹、肇求舍利、時汝祖父司馬達等、便獻舍利、又於同無僧尼、於是汝父多須那、為橋豊日天皇出家、恭敬仏法、又汝姥鳴女、初出家、為諸尼導者、以修行教、今朕為造丈六仏、以求好仏像、汝之所獻仏本、則合朕心、又造仏像既訖、不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戸、然汝不破戸而得入、此皆汝之功也、即賜大仁仁位因以給近江國坂田郡水田甘町焉、鳥以此田、為天皇作金剛寺、是今謂南淵坂田尼寺、（中略）、皇太子亦講法華經於岡本宮、天皇大驚之、播磨國水田百町施于皇太子、因以納于斑鳩寺（書紀）
623	推古31	『池邊大宮治天下大王天皇及東宮聖王受賜而歲次丁卯年仕奉（聖師像光背銘文）』 田大宮治天下大王天皇及東宮聖王、法隆寺開寺、并四天王寺、中宮尼寺、橘尼寺、蜂岳寺、池後尼寺、葛城尼寺、敬造仕奉（法隆寺御靈縁起并流記資財帳） 『法興元三年歲次辛巳二月鬼、前太后崩明年正月二十二日上宮法、皇枕病弗余下食王后仍以勞疾並、著於床時王后王子等及與諸臣深、懷愁毒共相卷願仰依三寶當造釈、像八寸身此類力極延壽安、住世間若是定業以背世者往登浄、上早昇妙果二月二十一日癸酉王后、即世翌日法皇登遐癸未年三月中、如願敬造釈迎尊像并挾侍及莊嚴、具竟乘斯微福信知道識現在安穩、出生人死隨奉三主紹隆三寶遂共、彼岸普通六道法界含藏得脱苦縁、同趣菩提使司馬鞍首止刹佛師造（釈迦三尊像光背銘文）』

2. 坂田寺を掘る

- ・坂田寺は、もっとも古い伝承をもつ寺院
- ・1972年の飛鳥国営公園研修宿泊施設(祝戸地区)建設に関わる事前調査から始まって、断続的に10回程度の発掘が行われ、主要伽藍が見つかった。
- ・しかし、寺伝の創建にかかわるところは不詳。

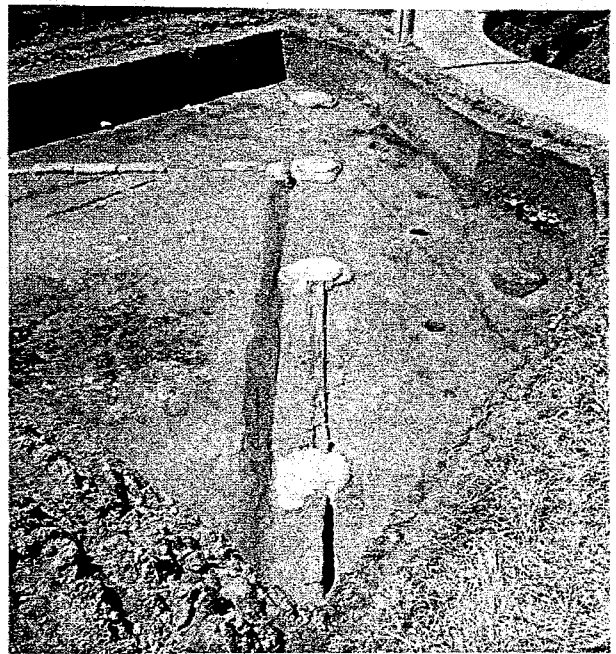
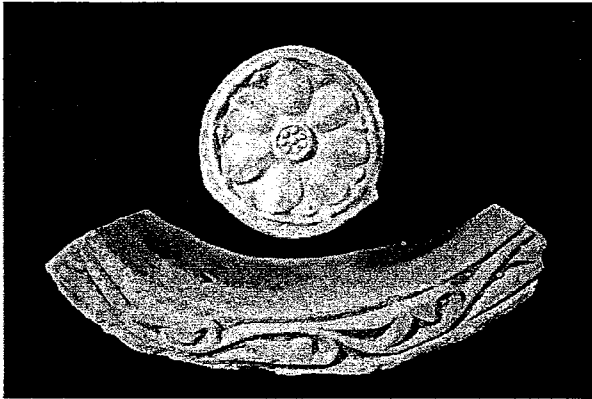




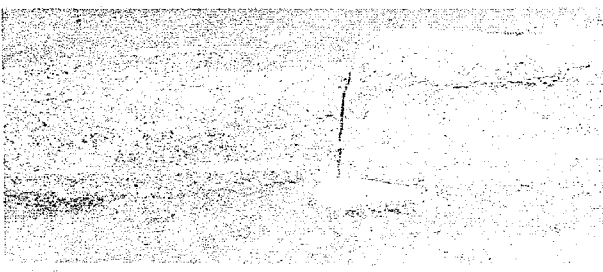
坂田寺 井戸・真

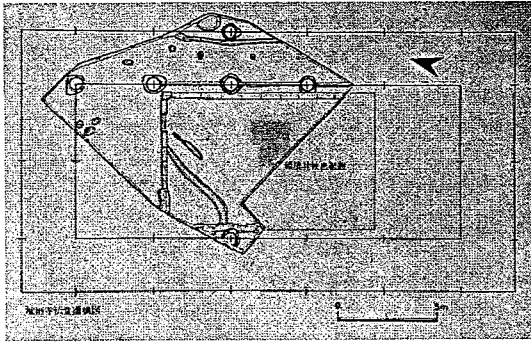
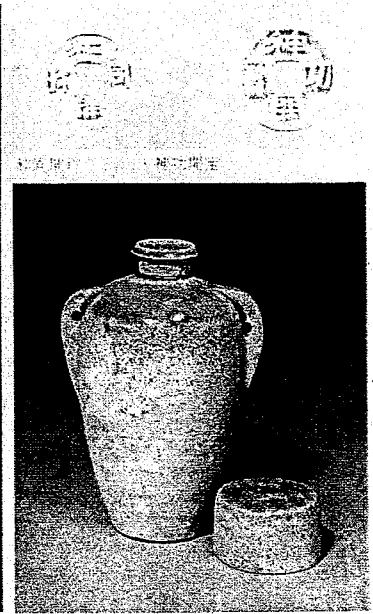
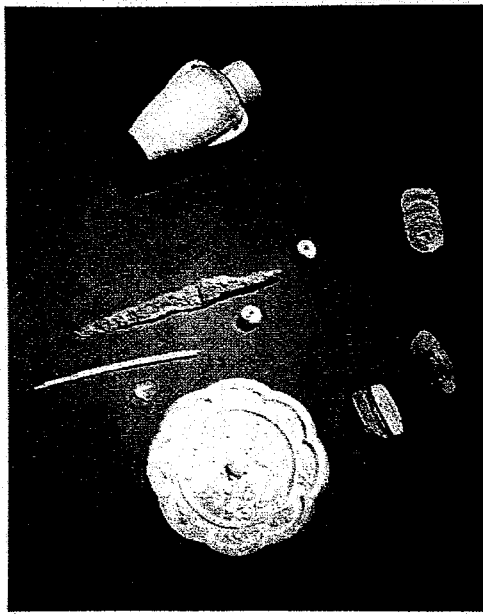


石垣

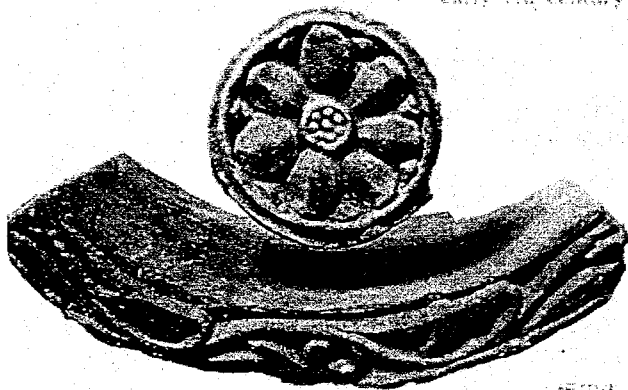


坂田寺 井戸

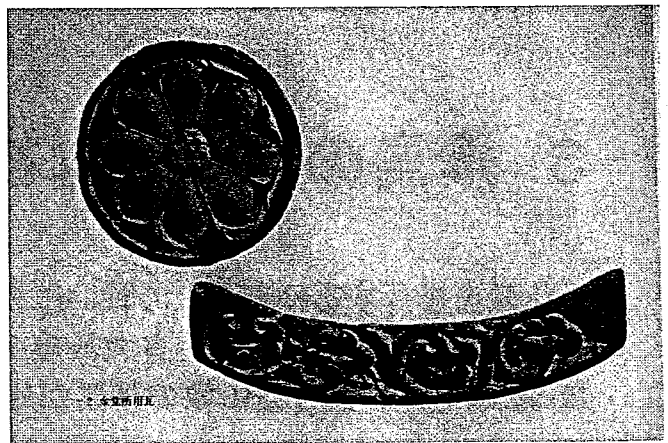




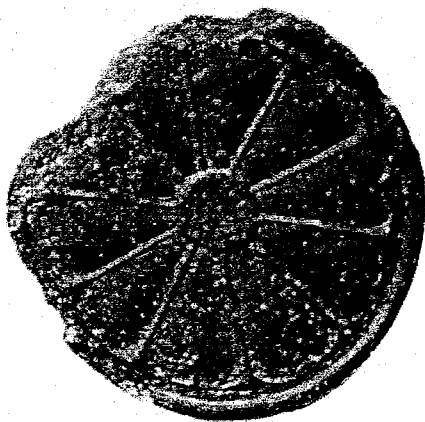
early 7th century



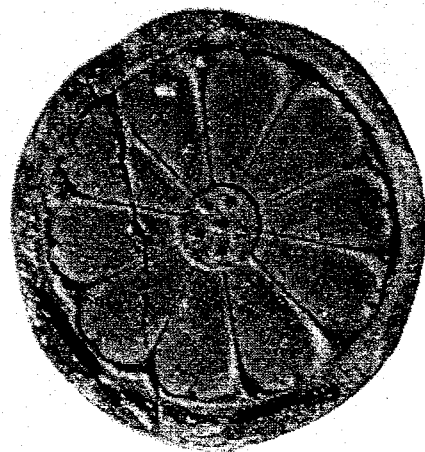
新出片

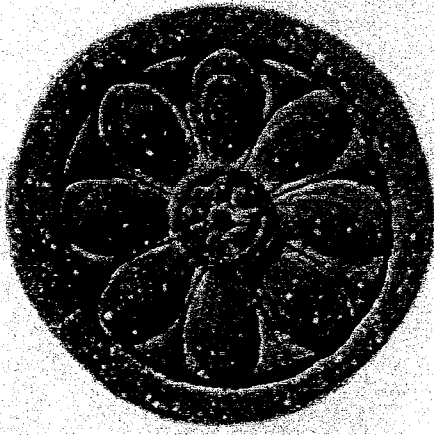


新出片



新出片





3. 飛鳥の代表的な初期寺院

仏教を排斥する物部氏との戦いに打ち勝った蘇我氏が建立した寺院が飛鳥寺。大和朝廷を支える最有力豪族の庇護のもとに仏教の受容がはじまったことに日本における仏教の特質が端的に表れる。

1) 飛鳥寺

- ・日本最古の本格的寺院
- ・飛鳥衣縫造祖樹葉之家を寺にする
- ・寺は正方位、下層遺構は方位を振る

2) 豊浦寺

- ・豊浦宮を寺にする
- ・宮も寺も方位を振る

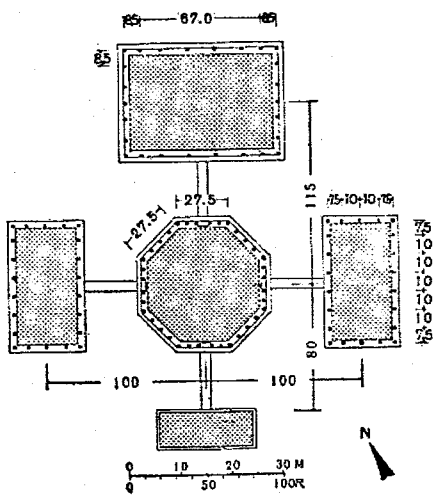


Fig. 20 清岩里廢寺伽藍配置圖

(太守は復原高量尺)



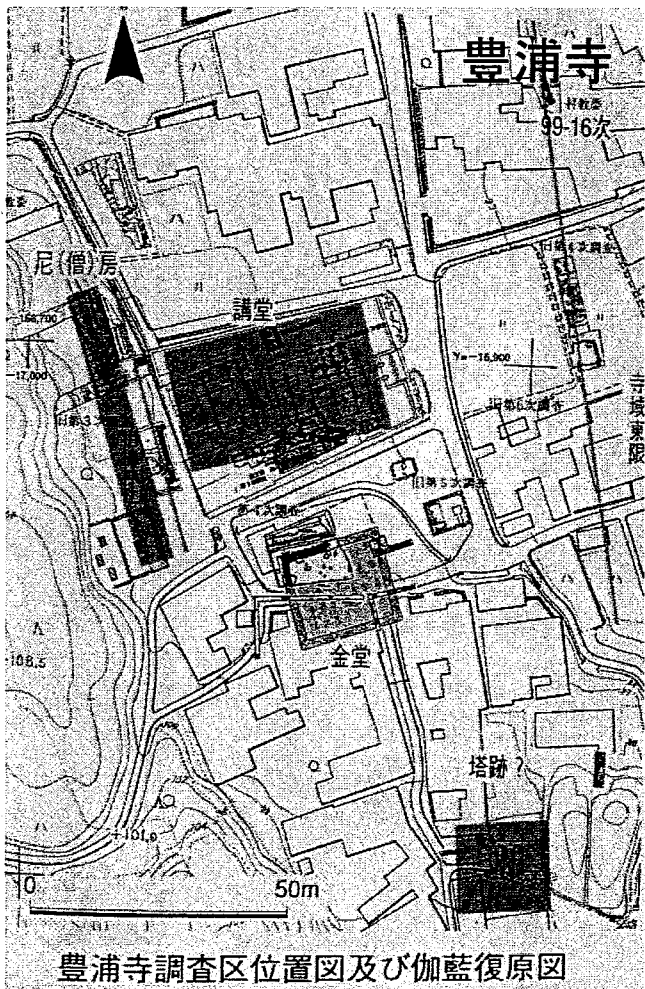
東金堂の二重基壇

扶余錦城山の二重基壇

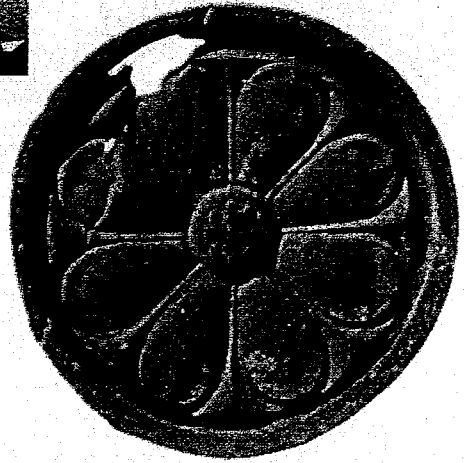
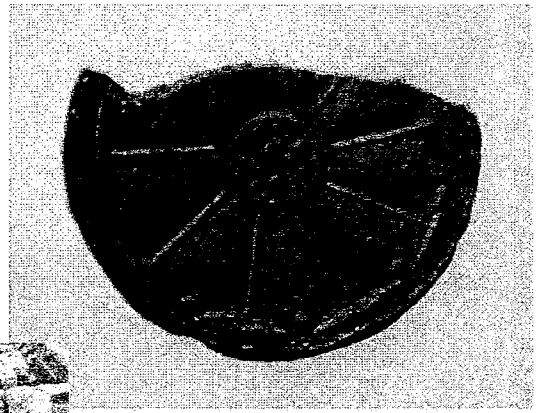


塔埋納品

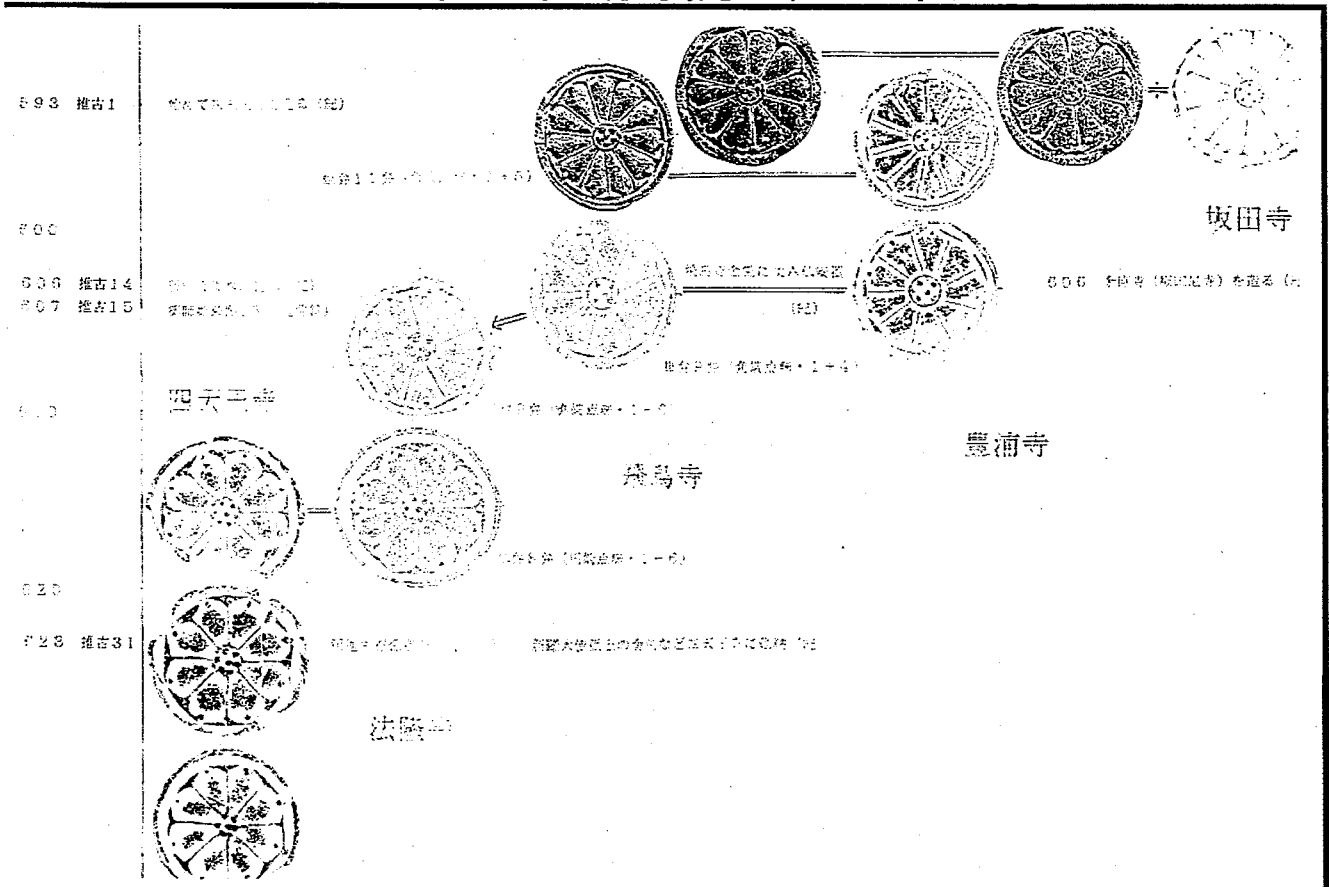




豊浦寺調査区位置図及び伽藍復原図



瓦に見る初期寺院の建立年代



4. 飛鳥時代前半の代表的寺院

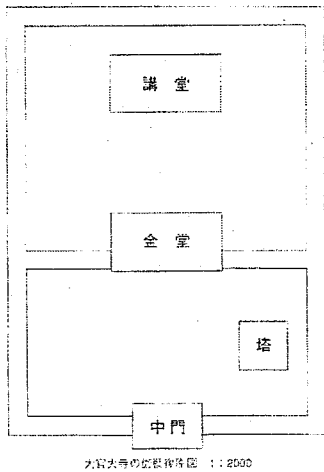
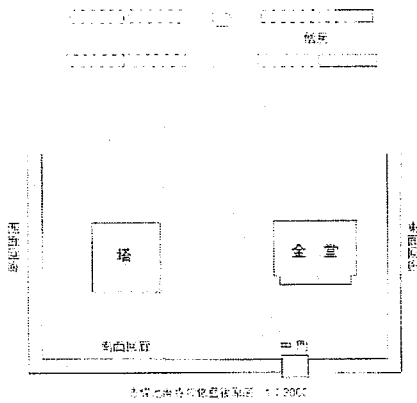
1) 百濟大寺

舒明11年(639)、百濟川のほとり子部社を切り開いて寺を造る。九重塔を建てる。

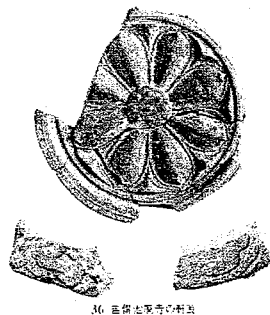
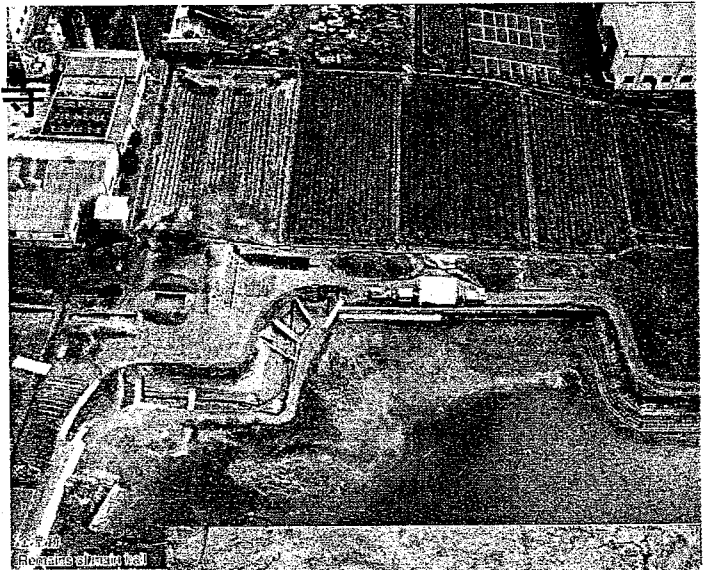
天武2年(673)年、高市に移し天武6年高市大寺と改称→藤原京大官大寺→平城京大安寺

2) 山田寺

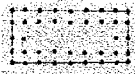
舒明13年(641)、右大臣蘇我倉石川麻呂の発願で建立。その後は数奇な運命をたどる寺。



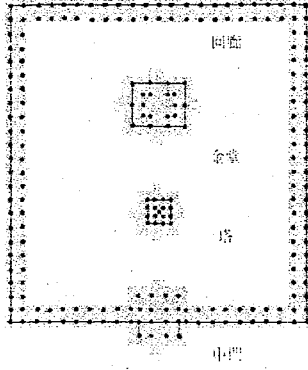
百濟大寺



山田寺

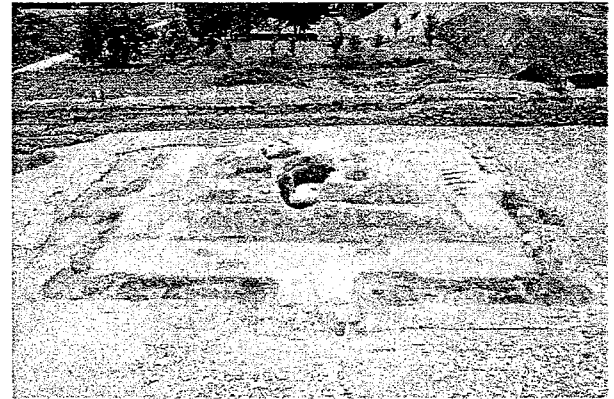
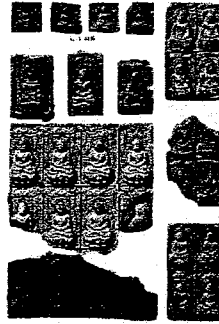
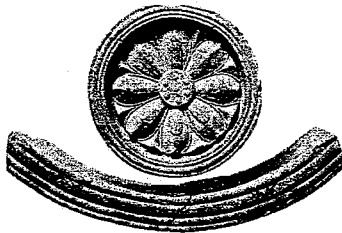
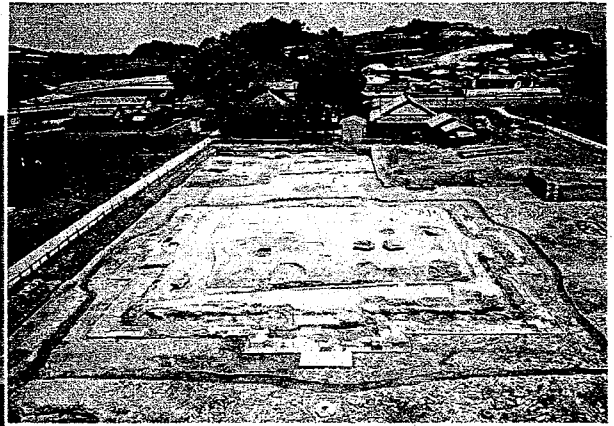


扉文



中門

山田寺伽藍復原図



5. 飛鳥寺と倭京

「京」の初見は推古16年(608)8月癸卯、隋の使節裴世清入朝の記事、そして白雉4年(653)に「倭京」の名が見える。飛鳥に「京」と呼ばれる後の藤原京や平城京のような碁盤目の都市計画をした都城はあったのか？

1) 京の条件

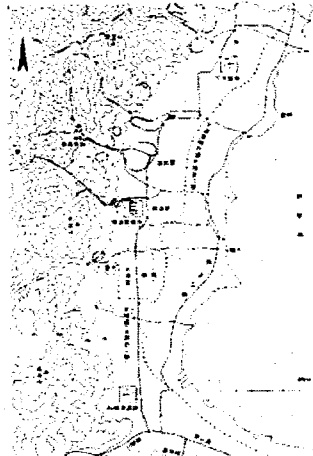
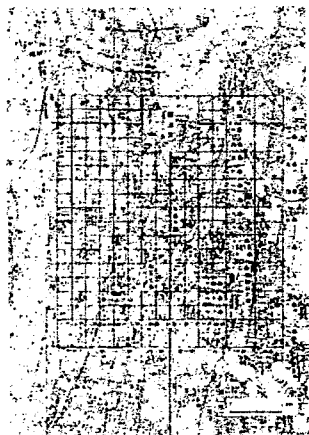
- ・方格地割りの都市計画
- ・正方位の軸線
- ・整然と密集する建物群

(行政区画としての京は律令の整備とともに規定される)

2) 飛鳥寺の役割

- ・巨大な伽藍 → 瓦屋根、丹塗りの柱、白壁、緑の連子窓
- ・正方位の配置
- ・周辺からは隔絶した景観 → 新たな都作りの象徴

寺院と方位

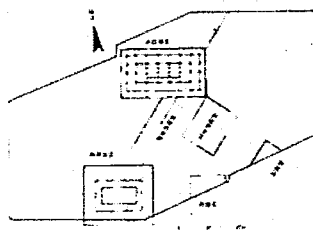


第10図 大仏堂と大東大寺の位置

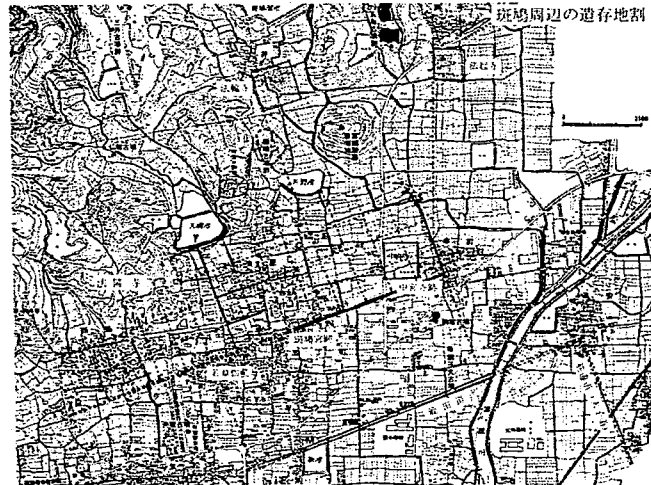
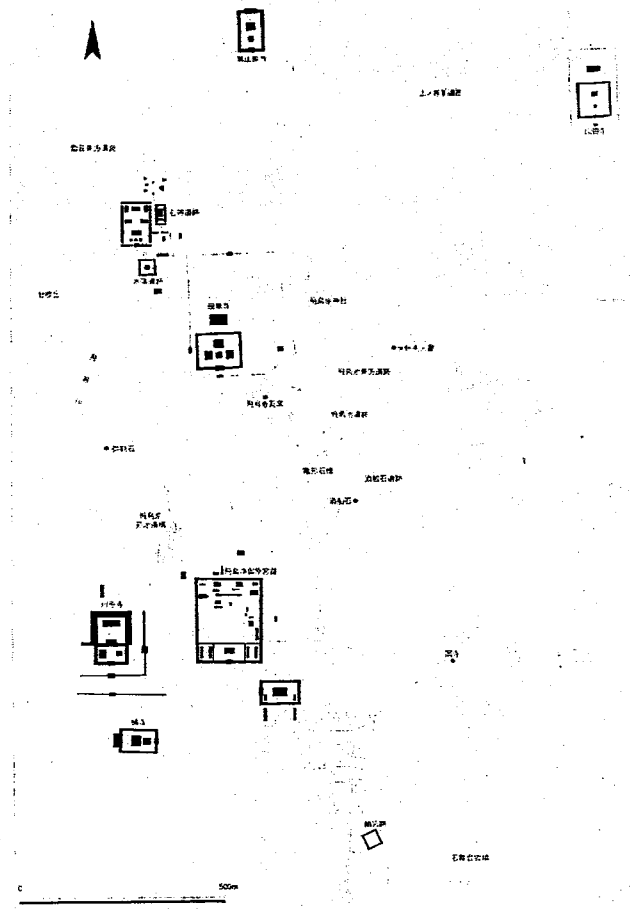
第6図 西大寺と大東大寺の位置

飛鳥寺中心部概	西に約1度30分
所石敷き広場	東に約8度
法隆寺	西に約20度
雲蓋寺上層	西に約30度
雷丘東邊路	西に約40度
法隆寺西に御旗	西に約30度
若草御旗と御旗宮	西に約20度
四天王寺	西に約30度
白濱大寺	南に約1度
穴太東寺上層	東に約2、4度
穴太東寺下層	東に約3、5度

表1 法隆寺院・法隆寺院の方位

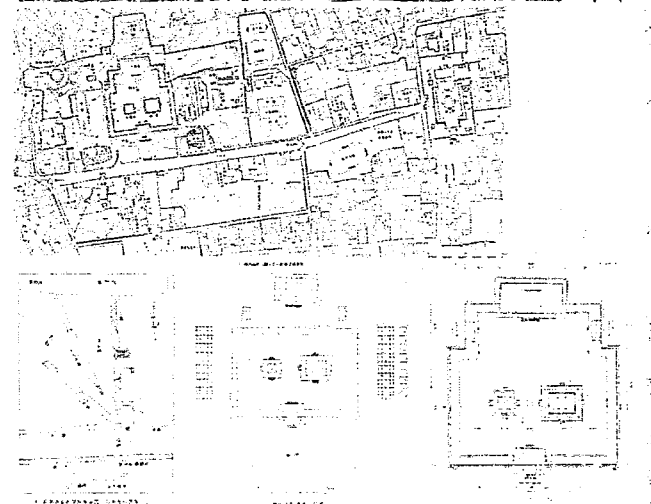
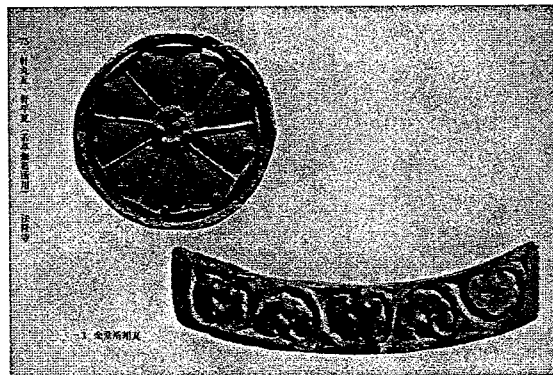


第11図 大仏堂の透視



法隆寺周辺の遺存地割

法隆寺に見る伽藍と方位



6. まとめ

- ・飛鳥は、7世紀初期とそれ以降ではその姿を一変する
- ・出発点は、飛鳥寺の造営（あるいは山田道か）
- ・それは、国の中心としての都を意識した計画
- ・キーワードは正方位の計画
(正方位をとる四天王寺も、後に一時首都であり、7～8世紀を通じて副都であり続ける難波京にある)

7世紀後半の飛鳥

